Our Stories

精子提供・卵子提供・代理懐胎で
親やドナーになった人達の物語

ふぁみいろネットワーク

Our Stories

ふぁみいろネットワーク

CONTENTS

まえがき
手記の刊行にあたって …… 10
この手記集で使われている用語について …… 14

「精子提供」
01 ドナー精子で子どもを授かり、育てるということ …… 18 三浦 隆
02 精子提供から始まる家族 …… 23 戸井田 かおり
生殖補助医療法案の経緯と
ふぁみいろネットワークの活動 …… 31 白井 千晶
03 第三者精子提供による妊娠、出産、子育て経験談 …… 42 あかつき
04 精子提供をめぐる冒険 …… 72 カリコの妻
当事者からみた十五年 …… 81
05 「パパもね、トランスジェンダーなんだ」 …… 91 戸井田 かおり
06 精子提供で子どもを産んだ私が伝えたいこと …… 100 大島 海都 ハチ
FTM当事者が子どもを授かるまでの道のりと
これからへの思い …… 108 大島 海都

07 私たちの道 …… みー 120

08 女性カップルと妊活中の困難 …… 齋藤　エリカ 124

09 私の選択：選択的シングルマザーとしての道のり …… かがりび 132

どのような制度が必要か

10 未婚で海外精子バンクと胚盤胞凍結を使い選択的シングルマザーに …… 華京院　レイ 141

11 夢への長い旅の途中 …… ハナミズキ 147

“法律なし・バンクなし”の日本の精子提供が抱える現実 …… 工藤　万知 152

12 子育ては、誰のもの？ …… 櫨畑　敦子 155

「卵子提供」

13 スワイヤー症候群と診断され、母になるまで …… あかり 178

不妊治療とSRHR、親の人権 …… 佐伯　英子 180

14 卵子提供を受けて親になる …… 綾原みなと 183
15 卵子提供までの道のり …… ぽちくん 196
親とは何かを考える …… 白井 千晶 200
「代理懐胎」
16 代理懐胎という選択、倫理学者の苦悩 …… 飯塚 理恵 208
17 私の選択 …… 佐藤 明美 218
18 人生でやり残した事 …… madame Y 222
19 手記のためのノート …… 荒川ナッシュ 医 231
子どもの権利とウェルビーイング …… 佐伯 英子 248

「ドナー」

20 誰かの未来につながった私の勇気 …… ミライ 252

21 卵子ドナー体験談 …… 伊藤 ひろみ 259

ドナー・代理懐胎者の人権 …… 佐伯 英子 263

あとがき …… 266

手記の刊行にあたって

ふぁみいろネットワーク共同代表
綾原みなと

ふぁみいろネットワークは、精子提供・卵子提供・代理懐胎によって家族形成を行う人々の当事者団体です。このたび、ソーシャル・ジャスティス基金の二〇二四年度～二〇二五年度の助成を受けて、私たちの家族の物語を一冊の手記集にまとめました。

私たちが当事者の声を集めようと決意した背景には、私たちが長く抱えてきた、うまく言葉にできないような苦しさがあります。第三者から精子や卵子の提供を受け、あるいは他者に代理懐胎を依頼することによって家族を築くことは、私たちにとって熟慮の果ての選択であり、その後の子育てはありふれた日常の積み重ねでもあります。しかし社会の中では、私たちの姿はしばしば誤解され、ゆがんだ眼差しにさらされてきました。

私たちがテレビやSNSなどで体験を語ると、おびただしいアンチコメントに晒されます。それもそのはず、小説や映画などのエンターテイメント作品の中では、当事者は「他者の人権を踏みつけてでも自分の欲望を追求する、自己中心的な変わり者」としてセンセーショナルに消費され、そのような

ステレオタイプが一人歩きしてきました。学術研究の領域においても、私たちは研究対象として常に批判的な分析の対象となり、人生の選択に葛藤しながらも主体的に行動する語り手として敬意をもって尊重される機会は限られてきました。また、臨床現場の専門家からは、「親になる資格」や「親としての覚悟」を常に問われ、教育され管理監督されるべき存在のように扱われることも少なくありませんでした。その背後にあるのは、私たちに対する社会からの不信感と、「あるべき家族像」に私たちを従わせようとする社会の側からの圧力です。

こうした社会状況の中で、当事者は孤立し、互いに分断されてきました。特に、精子提供、卵子提供、代理懐胎の当事者がお互いの違いを超えて連帯する機会は、二〇二二年十一月にふぁみいろネットワークが結成され、多様な当事者のお話会や親子会を開催しはじめるまで、ほとんどありませんでした。当事者は、「こんな思いをしているのはきっと自分だけだ」という思いを胸に、ようやく家族に加わってくれた子どもたちも将来同じように孤立したり、周囲からの偏見に苦しんだりするのではないか、という不安を抱えて、孤独な歩みを続けていました。自分の経験を語る言葉を見出せないまま、心の奥に沈黙を抱えてきた人も少なくありません。

私たちは、その沈黙を少しでもほぐしたいと願いました。誰かに消費されるための物語ではなく、自らの手で、自らの声を紡ぎ直すこと。それが、この手記を当事者主導で編纂する大きな意義です。ここに集められた言葉は、一人ひとりの生身の経験の証であり、社会に向けた対話の呼びかけでもあります。本書に綴られた声は、決して一様ではありません。喜びや感謝とともに、葛藤や不安や怒りも率直に語られています。その多様さこそが、当事者のリアルを映し出しています。読者

の皆さまには、ぜひ「正しい／間違っている」とか、「その言葉を発する資格がある／ない」などと裁断するのではなく、まずは耳を澄ませるように受けとめていただければと願っています。

本書に収録されている手記の書き手は、さまざまな背景を抱えて精子提供・卵子提供・代理懐胎に辿り着きました。不妊症に長く苦しんだ人もいれば、自分やパートナーの不妊を突然告げられた人、医学的な意味における不妊症に該当しない人々もいます。婚姻夫婦もいれば、現代の日本で婚姻できない同性カップル、婚姻を選ばない選択的シングルの人々もいます。私たちは、医学的・社会的な差異を理由とする当事者同士の分断を望んでいません。私たちは多様な人々の集まりですが、その多様性の中にこそ、多くの希望や共感の種が含まれていると感じています。

本書は、当事者と社会を隔ててきた溝を少しでも埋めて、社会的対話の土台となることを目指しています。そのため本書では、多様な当事者の手記に加えて、その声が発せられた背景を伝えるために、精子提供・卵子提供・代理懐胎をめぐる国内外の状況を解説するコラムや、当事者に伴走する研究者からの寄稿文もあわせて収録しています。

家族のかたちに丸やバツを付けあうのではなく、お互いの多様なあり方をその背景も含めて理解しあい、尊重しあえる社会へ。そのためには、先入観や不信感をいちど手放して、私たちの生の声に触れ、私たちの選択の背景に想いを馳せてくれる方が一人でも増えることが大切だと考えています。

最後に、ソーシャル・ジャスティス基金の皆さまに深い感謝をお伝えします。そして、勇気をもって自身の経験を語ってくださった当事者の方々に敬意を表します。この手記が、これから同じ道を歩

もうとする人々にとっての灯火となり、精子提供・卵子提供・代理懐胎をめぐる社会的公正の実現にむけた礎となることを、心から願っています。